



## 子どもの心の健康講座 ②

# 子育ての歴史2

日本における明治時代ごろの子育ては、どのようなものだったのでしょうか。今回は開国と明治維新に始まる時代の子育ての様子を見ていきましょう。「参考文献・滝川一廣「子どもたちの精神医学」医学書院、2017／森山茂樹・中江和恵「日本子ども史」平凡社、2002／稲垣由子「子ども学概論」丸善／ネット、2012]

明治時代は、これまでになく子どもの数が増えた時期でした。明治維新によって身分制度が廃され、(差別は残ったものの)生きる権利を獲得するところからスタート。親は子どもを愛情豊かに育て、子どもは親に対して儒教的な恩を重んじる時代でした。

1872(明治5)年には学制が制定され、学校教育が始まりますが、同年に徴兵令が出されます。富国強兵政策のもとで「産めよ、ふやせよ」のスローガンが掲げられ、間引き(嬰兒殺し)は禁止され、多産が奨励されました。明治初期からの百年で、日本の人口は約3千万人から約1億2千万人へと4倍に増えたとされています。この富国強兵という国家的な社会政策は、徐々に

子どもと親との関係に社会的な統制力を持って割り込んでいきます。素朴な愛情や子育ての知恵が影をひそめざるをえず、子どもたちは「お国のために」と言うような国が目的とする構成員としての視点を持つようになる。官僚的に統制された儒教的な子育て観が出てきました。近代化、工業化の時代でもあり、多くの子どもは、近代

国家の国民として、家業と異なる職業を目指して教育を受け、都市に出て親と異なる人生を送ることになりました。



この頃、捨て子の数は、明治時代前半は年間5千件台だったものが、明治30年代から減り始め、大正年間には1千件を大きく下回りました。近代化とともに捨て子という形で子どもを世間に託す暗黙のシステムが消え、それと入れ替わるように親子心中の新聞報道数が増えました。家督相続のための養

子縁組は多かったものの、それ以前のような貴い子は社会から消えていきました。また、江戸時代には、経済

的困窮などから墮胎や間引きが多かったものの、育てる子どもに対しては可愛がり、愛情深く接していました。しかし、第二次世界大戦後まで乳幼児の死亡率は非常に高く「7歳までは神のうち」と言われ、人々は諦めの感情を持っていました。明治初期では1歳未満の乳幼児は1千人のうち約150人が亡くなっていました。栄養状態の悪さや、衛生環境の問題もあり、天然痘、麻疹、コレラ、赤痢、疫痢、ジフテリア、発疹チフス、溶連菌感染症、インフルエンザ、狂犬病など、今ではその一部はワクチンにより予防も可能ですが、急性の伝染病が絶え間なく流行して、子どもたちの命を奪っていました。

### 戦前・戦後の子育て

日清・日露戦争、第一次世界大戦を通じて軍人の様子を見聞きすることが増えました。軍国映画や、教科書の検定などの影響から、軍人志望の少年や軍国少女が非常に増えました。彼らにとって、日本の軍隊がアジア諸国で戦争をし、

占領して植民地にするという考えは生まれた時から当然のものでした。その後、太平洋戦争に突入し、食料や物資が不足し、学童疎開が始まり、都市が空襲を受け、沖縄が戦場になり、広島と長崎に原子爆弾が投下され、敗戦します。多くの子どもたちが傷や後遺症を負い、家族を失い、その後数年間は食料が不足するなど、混乱の中で悲惨な状況に巻き込まれました。

第二次世界大戦での敗戦によって、それまでの富国強兵を基礎とした社会統制力は失われることになりました。戦後、海外からの民主主義を受け入れて国家的な方向性を変革していきます。子どもに対する政策としては、戦災孤児への福祉対策が講じられ、児童福祉法が制定されました。国の復興に伴い、個別的で愛情豊かな子育てと、経済的な働き手としての人材として育てるといった流れが生まれました。

児童精神科医

北畑 歩